



TITLE:

天文用語に関する私見(1)

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 天文用語に関する私見(1). 天界 1934, 14(156): 212-214

ISSUE DATE:

1934-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165507>

RIGHT:

天文用語に關する私見 (1)

(山 本 生)

吾人は本誌の創刊以來たび々天文用語について 學界の注意を呼び起さうと力めてゐる。(本誌第12號第249頁や、同第120號第209—210頁に此の要求の主意は盡されてあるから、讀者は是非くりかへし見て頂きたい。)ところが如何なる事情によるか知らないが、此のマジメな問題の研究が、今尙ほ國內の權威者間には顧みられず、學俗界は只「其の日暮し」をやつてゐる間に、天文學術の進歩や普及は益々盛んになり、事態は愈々複雑になつて行くやうに見える。ついては、日頃此の事に關して可なりの關心を持つてゐる筆者は、さき頃、畏敬する野尻抱影氏から新著「星座神話」を贈られ、其れを読み行くうち、天文用語についての考察を大に刺戟された點が多いので、今は只一般學俗界の自然の成り行きに委せ置くに堪えず、とりあへず、平素抱懷する所を發表して、自らの主張を明らかにし、又、ひろく社會各方面の人士からの批評を仰ぎたいと思ふ次第である。

こゝに筆者が問題とするのは、言ふまでもなく天文學術の記載に用ゐる邦文用語である。即ち、日本語といふ立場からの考慮である。此の立場から見て、筆者は、

(1) 本當の日本語、即ち、我が日本人が其の民族の傳統や、生活態度、獨特な語源、轉化法等から見て、正しい邦語を、學術語にも生かしたいと思つてゐる。經度緯度を、歐米諸國はラテン語の *longitudo* や *latitudo* から直接に轉用して來た語を用ゐてゐるのに、ドイツでは思ひ切つて明らかに *Länge*, *Breite* と呼んでゐるなど、少々國粹過ぎるイヤ味をさへ覺える例ではあるけれど、しかし、各國々語を貴ぶといふ點から考へると、之れ位の意氣は有つても悪くはないやうに思はれる。(尤も此の例については、後に、全く違つた理由から批評して見たい點もあるが)。筆者自身も、同様な心持ちで、*Mons Mensa* の譯語として、「テ「ブル山」などといふ變テコなものよりも、むしろ

「ひらやま」といふ日本語を採る次第である。

(2) 今日の天文學は所謂西歐の天文學の直接系統を持つてゐるのであるから、天文用語は、多くの場合に西洋語の譯語である。従つて、譯語譯文の理論から見て妥當なものを用ゐなければならない。筆者の意見としては、譯語の理想は、其の譯語を權威者が見た場合に、容易に其の原語が聯想されるのが良いと思ふ。従つて、一原語には一定の譯語が定めらるべきである。例へば、今日の日本語では、“international”と云ふ英語を「國際的」と譯すことが一般に認められてゐるのであるから、天文上にも此の習慣に習ふのが便利である。“International Astronomical Union”は正に「國際天文同盟」と譯すべきものであて、決して「萬國天文學會」とか「世界天文會議」とか「デタラメ」に譯すべきでないと思ふ。Jeans 氏の著書の標題“The Mysterious Universe”は、特別な理由のない限り、「神祕の宇宙」と譯すべきものあつて、決して「新物理學の宇宙像」などと全く無關係な言葉で置き換へるべきでない。

又、社會文化の狀態から見て、原語を必ずしも柔かい日本語に譯さなくても良い場合がある。例へば、“Spectrum”や、“type”などは、「スペクトル」、「タイプ」のまゝで邦人には理解され得るのであるから、必ずしも「分光帶」とか、「型」とか言はないでも良からう。

(3) 日本語の中には、所謂「漢語」が非常に多い。明治時代までは、漢語でなければ權威の無いやうにも思はれたことが多かつた。先年、議會で、軍用語「獨立家屋」と俗語「一軒家」との比較論が出たことがあるくらゐ。學界にも勿論此の種の語が多い。しかし、遠い將來、日本語の變遷に関する見透しを多少は考へて、殊に電話や、ラヂオや、ロマ字運動や、カナモジ運動が相當に進展しつつある現状から見て、今後、漢語といふものは、減ずることはあつても、恐らく増すことはなく、漸次、耳で聞いて判る言葉に變つて行くとの見地から)天文用語も、なるべく漢語を整理する方針を採るのが賢明と思はれる。例へば、彗星(スイセイ)を止して彗星(ホーキボシ)と呼どとか、「望遠鏡」(少くとも星座名の場合)よりも「遠眼鏡」(トウメガネ)を用ゐるとか、「流星」の代りに「流れ星」と呼ぶとか。

(4) 日進月歩の現代では、新しい語に對する用意が無くではならない。従

つて、之れもやはり遠い(或は近い)將來の洞察から、不便な不適當な語を潔く棄て、新時代に應ずる勇氣が必要である。“Nebula”を吾人は長く「星雲」と譯してゐたが、近年“Star-cloud”といふ原語が用ゐられ始めた——之れを「星雲」と譯するより外に途が無いのであるから、“Nebula”の譯語を寧ろ改めて、「星霧」とすることを主張し、實行してゐるのである。

(5) 今まで用ゐてゐた譯語が單に誤譯や拙譯であつた場合に、其れを潔く改めて、禍根を將來に絶つことも當然である。「時間」と「時刻」とを明瞭に區別すること、「海蛇」を「ヒドラ」と改めること、「隕石」を「隕星」に、「科學」を復舊して「理學」に、「光度」を「光級」に……其の他、此の類は頗る多い。

まづ、上の如く、ごく一般的、原則的な點を擧げて、筆者の主張の立場を明らかにして置いて、次ぎに、もつと立ち入つた論を進めたいと思ふ。天文用語の問題については、今日の我が國の學俗界に極めて多くの關心者があることと思ふし、殊にアマチュア諸君の中にも、疑問や、意見や、主張や、希望などを平生から持つてゐられる方が少なからうと思ふ。どなたでも、御遠慮なく、本誌編輯部や、筆者へ、御質問、御批評、御忠言、其の他、何でも申越して頂きたい。よろこんで其等を伺ひ、又、適當なものは、誌上に發表して、更に廣く讀者と、研究を共にしたいと思ふ。(つづく)

天文家の悩み

夜な夜な星を見る天文家の身に、なやましいものは決して只空に立ちふさがる雲や霧や雨や煙のみではありません。吾人人類の生命の親である「大氣」——之れにも可なりひどく「いぢめ」られてゐるのです。太陽や星は、赤と言はず、青と言はず、すいぶん長い波長から短かい波長まで、あらゆる波長の光線(即ち電波)を送つて呉れてゐるのですが、そのうち、

紫外線は殆んど完全に高層大氣中のオゾンに吸収され、

赤外線は又、酸素と水蒸氣とに大部分を奪はれます。それから、天文器械も亦可なりいたづら者でありまして、

硝子のレンズ
反射鏡の銀面 } は共に紫外線を妨げます。其れがため將來、レンズ類は、ガラスの代りに、石英を用ゐ、

反射鏡は銀面の代りに、アルミニウムを用ゐるやうになりませう。[N.Y.T. より P. W. Merrill 博士の談。(Dec. 31, 1933)]